

奴らの玉を潰せ！ 前編

- 1 -

その夜、僕は知らないうちに極悪人になっていることを知った。

金曜日。会社の同僚たちと新宿の盛り場で呑んだ帰りだった。僕は一人、終電に間に合うようにと小走りで急いでいた。

向こうから歩いてきた三人組の少女の間を擦り抜けようとして、一人の肩にぶつかった。足元がおぼつかないくらい呑んでいた僕は、よろけて転び、道に手をついた。

「いってえな、何すんだよ！」

顔をあげると、三人組が僕を見下ろしていた。三人とも茶髪、タンクトップにミニスカートに厚底サンダル、化粧が濃すぎて人相は分からないが、真ん中の一人が、剥き出しの二の腕をさすって、顔を顰めている。

「ごめんごめん、急いでいたものだから」

立ち上がろうとして、またもよろけた。そのとき、左側にいた少女が、

「あーー！」

と僕を指さして叫んだ。

「ひょっとして、こいつ、例の……」

- 2 -

少女は、バッグから新聞紙を取り出した。薄いタブロイド版の夕刊紙のようだった。

二人の少女も新聞を覗き込み、「あー」「まさかあ」と叫んだ。

僕はきよんとした。三人は、新聞と僕の顔を見比べていたが、やがて、僕とぶつかった少女が一步進み出た。

「おまえ、横山博之か？」

僕の本名だった。僕はますます困惑した。え、そうだけど、と答えながら、目をこすって三人を見つめた。顔見知りは一人もいない。

少女はつかつかと歩み寄ると、いきなり僕の胸ぐらをつかんでぐいと引っ張った。僕は、あいたたた、と呻きながら、彼女に持ち上げられるようにして立つしかなかった。もともと長身のようだったが、厚底サンダルのせいで、並んで立つと、目の前にタンクトップの胸元から覗く乳房の谷間が突きつけられた。

「何、見てんだよ！」

彼女は叫ぶなり、いきなり僕の股間を蹴りあげた。僕の体は彼女の膝に持ち上げられ、足が地面から離れた。

凄まじい衝撃だった。目の前が真っ暗になった。僕はどさりと地面に投げ出され、右手で激しく痛む股間を抑え、左手で口を抑えた。僕は嘔吐していた。

「きつたねえの……」

少女は眩き、べっと唾を吐いた。他の二人が近寄ってきた。サンダルを脱いで、反省しろ、サル、とか言いながら僕の頭に打ちつけた。僕は昏倒した。

交番の警官が駆けつけたときは、すでに少女たちの姿は消えていた。頭痛と股間の痛みを意識を取り戻した僕は、病院まで送ろうか、という警官に、大丈夫です、帰れます、と拒絶した。女性に金玉を蹴られて失神したという恥ずかしさから、一刻も早く家に帰って一人になりたかった。僕は謝辞し、タクシーを拾って帰った。

翌日は土曜日で助かった。一晩中、激痛に呻きながら寝ることも出来なかった。鎮静剤を山のように吞んでやっと早朝にまどろみ、翌日の昼間に眼が覚めた。股間の痛みを堪えながらトイレに行くのと血の小便が出た。陰囊が倍くらい大きさに腫れ上がっていた。

「いったい、どうしてこんなことに……」

ベッドに転がって天井を見つめながら、僕は不思議で仕方なかった。

見ず知らずの女の子に、いきなり急所を蹴られる謂われのあるはずがない。それよりも気になったのは、蹴られる前に、少女たちが見つめていた新聞紙だった。しかも、少女たちは僕の名前を正確に訊ねた。あの新聞紙には何が書いてあったのだろう。

二十八歳の庶務課のサラリーマン。とくに人に恨みを買うような事はしていないはずだ。会社の同僚ともそこに付き合っていた。自分で言うのもなんだが、見た目は地味な善人顔で、性

格も控えめ。といってネクラではない。誰にでも、いい人、として通っているのだ。

土曜日は、とにかく鎮静剤を呑んで、一日じゅう寝ころがっていた。

翌日は日曜日。やつと痛みが引いてきた。それと同時に、急速に食欲が湧いた。なにしろ前日は何も食べていなかったのだ。近所のラーメン屋に出かけた。

ラーメン屋には、僕の他に、三十歳くらいの、地味なTシャツにジーンズ、サングラスをかけた暗い雰囲気的女性が一人いるだけだった。

その女性客が、ちらちらと僕を見ているのに気づいた。いやな予感がした。僕は、ラーメンを素早く食べ終わると、そそくさと店を出た。

店からアパートまでは、狭い路地を抜ける。路地の中ほどまで来たとき、不意に後ろから肩に手を置かれた。

「横山博之ね」

振り向くと、ラーメン屋にいた女だった。あつと驚いたと同時に、股間にまたも凄まじい激痛が走った。

女は、僕の股間を膝で蹴りあげたのだ。

たまらず僕は地面に膝をつき、股間を両手で抑えて呻いた。息が止まっていた。ぎゅっと眼を閉じた。涙が溢れ出た。

やつと呼吸が出来るようになって顔をあげた。女は腰に両手をあてて、僕を見下ろしている。

「な、なんでこんなことを……」

僕は声を絞った。

女はしゃがみこんで僕の胸ぐらをつかみ、いきなり平手打ちを喰わせた。頭がくらくらした。

「あんたみたいな奴は、絶対に許せないのよ」

女はサングラスを外した。眼鏡をとると、意外に整った顔だちだった。だが、右眼の縁に傷痕があった。目立たないようにしているが、外科手術の跡のようだった。

「あんたみたいな奴って……。だいたい、僕はあんたのことなんか知らない。なんで僕の名前を知ってる？ いったい、僕が何をしたというんだ……」

「私も、あんたとは初対面よ。でもね、あんたのように、平気で女を殴るような奴は許せないの」

「え？ え？ え？」

僕は呆気にとられた。今のところ恋人はいないが、これまで数人の女性と付き合ったことはある。僕は「いい人」が売りだということは自覚していたから、なるだけ優しく相手を思いやることを心掛けてきた。絶対に、殴るなんて真似はしていない。生まれてこの方、喧嘩すらししたことのない事なかれ主義者なのだ。

「とぼけるんじゃないよ」

女はまたも平手打ちを喰わせた。平手打ちという奴が、こんなに効果的だとは、今日初めて知った。一瞬、脳が激しく揺さぶられたように感覚が麻痺し、視界が真っ暗になる。

「や、やめてくれよ」

僕は両手で顔を覆い、涙声で懇願した。

「ほんとうに覚えがないんだ。信じてくれ。何かの間違いだ」

「じゃあ、これは何よ」

女は、ジーンズのポケットから紙片を取り出し、僕の目の前につきつけた。新聞の切り抜きようだった。

切り抜きの上のほうに、大きな活字でこう印刷されていた。

「奴らの玉を潰せ！」

一瞬、意味がとれなかった。むしろ、僕はその文字の下に印刷された三人の顔写真に引きつけられた。真ん中が僕の顔だった。その左右に、四十歳くらいの貧相な男と、二十代半ばと思われる長髪の若者の写真が並んでいた。

それぞれの写真の下に、名前と「罪状」が記されていた。僕の顔の下には、「**横山博之**（28）、ドメステイック・バイオレンスの常習犯」とある。僕の住所や勤務先までが明記されている。

他の二人は、それぞれ「**加藤貞夫**（46）、レイプ犯、現在、仮釈放中」「**水沼修一**（26）、少女売春の元締め」となっていた。

さらに、顔写真の隣には、こんな文言があった。

法は、加害者の人権保護と証して、彼らのような極悪非道の男たちに正当な裁きを下していません。刑務所は、収容人員の不足を理由に厳密な審査もなしに犯罪者を次々に仮釈放しています。あなたのすぐ隣に危険な狼が野放しにされているのです。

われわれ女性は自衛のために立ち上がりましょう。まず、この三人の極悪人をわれわれの手で処刑しましょう。彼らを見かけたら、その睾丸を痛めつけてやりましょう。蹴つてもよし、握つてもよし、潰してもかまいません。悪行の根源を永遠に絶つてやりましょう！

そして、最後の一行は、そこだけ太いゴチック体でこう強調されていた。

彼らの睾丸を潰し、性的能力を奪うことに協力していただいた方（女性に限る）には、賞金として一千万円がWARR (Women against Rape) 日本事務局より贈られます。

「わかった？」

女は、青ざめて切り抜きに見入る僕を見つめながら、わずかに震える声で言った。

「私はね、五年もの間、夫の暴力に耐えてきた。やっと逃げ出せたけれど、何時、あの男が現れるかとびくびくして暮らしてる。女に暴力を振るう卑劣な男は許せないの。だから……」

「待ってくれ」

僕は必死で首を振った。誤解を解かなければ、この女によって睾丸を潰され、去勢されてしまうのだ。

「何かの間違いだ……。僕は、こんな目に合う謂われはほんとうにないんだ。あなたの境遇には同情するけど、だからといって、その恨みを僕にぶつけるのは筋違いじゃないですか」

女はまじまじと僕を見つめ、呟いた。

「あいつもそうだった……。おとなしそうな顔をして、周囲からもそう思われてた。閉ざされた家のなかでは野獣に豹変したのよ」

言うなり、女は手をのばして、僕の睾丸をぎゅっと握りしめ、ひねりあげた。僕は激痛と恐怖に絶叫した。

足音がした。女は反射的に立ち上がり、ちつと舌打ちをして足早に路地から去った。

僕はうつ伏せになり股間を両手で抑えてうんうん呻いた。涙が滝のように流れ落ちた。

通りがかりの老人に助けられ、なんとかアパートに帰り着くことができた。

それから三日間。血の小便が止まらなかった。陰囊は前にもまして腫れあがり、激痛と高熱にうなされ、ベッドでのたうち回っていたのだ。

四日目。やっと歩けるようになり、僕は出社した。周囲がなんとなくよそよそしい。挨拶をしても、眼を背けるのだ。変だな、と思っていたら、上司に呼ばれた。

応接室に行くと、直属の上司である小柄で前頭部が禿げ上がった庶務課長と、でっぶり太った白髪の総務部長がソファに座っていた。何事だろうと緊張した。

「ま、座りなさい」

禿げ頭の庶務課長が声をかけた。僕は座った。

「早速だが……」

庶務課長が封筒を取り出し、テーブルの上に置いた。

「これ、知ってるかい？」

僕は愕然とした。夕刊紙だった。一面の下三分の一のスペースを使ってあの広告が出ていた。

あの活字が踊っていた。

「奴らの玉を潰せ！」

髪の毛が惣毛だった。僕は首を振って慌てて否定した。

「う……嘘です。まったく身に覚えのないことです」

「ほんとうだね」

庶務課長が念を押した。

「誓います。なんで、こんな広告の対象になったのか、見当もつきません」

「君は休んでいたから知らないかもしれないが、会社に問い合わせが殺到している。おたくの会社はこんな悪党を雇っているのか、などと電話で聞かれて、対応に苦慮している。雑誌やテレビ

局から取材の申込みも来ている。まったく迷惑しているんだ」

「僕だって、迷惑しているんです」

僕は必死に叫んだ。

「金曜日と日曜日、この広告を信じた女性から、その……」

「この広告が提案しているような目にあつたというのか？」

「……は、はい」

「で、ほんとうに、この広告に書かれていることは、まったくの虚偽というわけだな」

「そうです」

「それは困ったなあ……」

もったいぶって話を聴いていた白髪の総務部長が口を開き、腕を組んだ。

「もし、君の言い分が正しいとしても、会社としても相当のイメージダウンを被っているのは確かなんだ。広報部では問い合わせが多くて仕事にならないと悲鳴をあげている」

僕の会社は半官半民で名前が全国に知られている。たしかにマスコミには恰好のネタだろう。

庶務課長が言った。

「実を言うと、今朝、君の家に電話をかけて、自宅で待機するよう伝えるはずだったが、行き違いで君は出社してしまった。携帯にもかけたが、電源が入っていなかった。もし、途中でマスコミに見つかっていたら、えらいことだったよ。なにせ、あいつらは、君の喋った何げない一

言でも、おもしろおかしく記事にしてしまうからね」

「はい、申し訳ありません……」

僕は小さくなって頭を下げた。被害者であるはずの僕だが、会社に迷惑をかけた、という一点で、おかみに慈悲を乞う罪人のように振る舞うしかない。

禿げ頭と白髪がかかるがわる喋ったが、もはや、耳から耳へ抜けてゆくだけだった。

「この夕刊紙、『つぼん・たいむず』君、知ってる？」

「いえ、聞いたことはありません。発行所の住所が印刷されているので庶務課員に行かせたのですが、そんな会社は存在しませんでした。駅のスタンドにひそかに紛れ込ませてあったり、電車の網棚に置いてあったりと、ゲリラ的に散布されているようですな。君、ええと横山くん、『つぼん・たいむず』って心当たり、ない？」

「このW A Rとかいう組織はなんなんだね？」

「それも調べさせてはいますが、警察でも把握していないようです」

「そうか。とにかく、調査は続けてくれたまえ」

「はい。あ、横山くん、君はもう今日は帰るたまえ。裏口にハイヤーを用意したから。見つからないように、そっと抜け出すんだ。家には帰るな。隠れ場所を用意したから、指示があるまで籠もっている。外には絶対に出るな。電話にも絶対に出るな。とくにマスコミには、余計なことを喋るんじゃないぞ。いいな」

何度も頭を下げて応接室を出て、地下の駐車場に向かった。黒塗りのハイヤーが待っていた。運転手に名前を告げて後部座席にぐったりと背をもたせかけた。

ぼんやりと車窓を流れるオフィス街の風景を見ながら、僕は改めて自分の置かれた立場を認識した。

得体の知れないテロ組織が、僕を去勢せよ、と女性たちに呼びかけた。そして、それに応じて二人の女性が襲撃してきた。誰かが、無実の人間を恐ろしい地獄に陥れようとしているのだ……。僕は震えあがった。

グレゴール・ザムザは、眼が覚めたら虫になっていた。僕は、女に暴力を振るう卑劣漢として、あの広告を信じた女性から狙われ、マスコミのターゲットにされ、会社から身を隠しているように命じられた。

……どうしてこんなことになっちゃったんだろう？

僕は泣きたかった。地味な人生だが、それなりに安定していた。ささやかな楽しみ、ささやかな異性体験。誰にも迷惑をかけずに生きてきたはずなのに。涙がこぼれた。

やがてハイヤーは、奥多摩の古ぼけた山小屋に到着した。かつては会社の更生施設だったが、老朽化したために誰も使っていない。

「ここ？」

僕は運転手に問うたが、彼は返事をしなかった。僕は仕方なく車を下りた。山小屋には人けがなかった。ペンキの剥げた重い木のドアを見つめると、ハイヤーが動きだした。呆気にとられているうちに、ハイヤーは猛煙とともに姿を消した。

取り残されたのか？

仕方なく、ドアノブに手をかけた。鍵がかかっていた。ドアのそばにインターフォンがある。ボタンを押した。

「はい」

くぐもった女の声が出た。

「あの……横山ですけど」

その瞬間、ドアが開いた。

「お待ちしました。どうぞ」

ドアが開くと、狭いロビーだった。木貼りの床にソファが二つ、テーブルが一つ置いてあるだけだった。ソファの傍らに、ベージュのスーツを着た佐伯紀子が立っていた。

僕より一年後輩、すらりとした中肉中背の眼鏡をかけたショートカット。不美人ではないが、無口で色気と愛想に乏しく、どちらかというと目立たない社員だ。

「こちらです」

佐伯紀子はくると踵をかえして、すたすた歩き出した。僕はあわてて後を追った。階段をあらると、三部屋並んでいた。そのうちの一つのドアを紀子は開けた。

「この部屋です」

十畳ほどの和室だった。片隅に文机が置かれていた。室内に小さなトイレと浴室が付いていた。押入れが半分開いていた。布団が一組だけ入っている。

佐伯紀子は、文机に眼をやった。茶封筒が置いてあった。

「今回の一件に関して会社に提出する報告書のコピーです。あなたも目を通して下さい」

「報告書？」

「庶務課長から私に、今回の件を調査するよう、業務命令が出ました。あなたとの連絡係も命じられています」

「連絡係……。何やらスパイ小説みたいだな」

僕は、不安を隠すように軽口を叩いたが、佐伯紀子は分厚い眼鏡の下の眼を鋭く光らせ、余計なことを言うな、と表情で示した。僕は口を噤んだ。

「一日置きに連絡に來ます。ドアを四つノックします。それ以外の訪問客は絶対に部屋に入れないように。それから……」

部屋の隅に眼をやった。紙袋が二つ置いてあった。

「あの袋のなかに、着替えと食事が入っています。あなたは外に出る必要はありません。とにかく

く、外部との接触は一切断つように。携帯電話はお預かりします」

紀子がさつと右手を突き出した。僕は仕方なく、懐から会社から支給されている携帯電話を差し出した。紀子は無造作にそれを奪い取り、ポケットに入れた。

「では、失礼します」

さつさと出ていった。

一人、取り残された僕は、紙袋の中身を見た。一つの袋にはトレーナーと下着が入っていた。

もう一つの袋には、弁当が六つ、お茶のペットボトル、そしてウイスキーの角瓶だった。

要するに、僕は監禁されたのだ。

文机の茶封筒を開けると、『にっぽん・たいむす』のコピーが入っていた。日付は今日だった。一面には、普通の夕刊紙に出ているような類のニュースが味気なく並んでいた。だが裏面を見て、僕はぎよつとして飛び上がった。

「WARNニュース。三人の標的のうち、一人を血祭り」

と大きな見出しで全面広告が打たれていた。

血祭りにあがったのは、例の三人の顔写真のうちの一人、レイプ犯の加藤貞夫だった。彼は、都内のガード下にあるボロアパートに住んでいた。仮釈放でシャバに出た後、刑務所のための貯金を食いつぶしながら、職安に通っていた。

WARニュースにはこう書かれていた。

今回、われわれWARの呼びかけに応えて、加藤貞夫の処刑を執行したのは、三人の勇敢な女性たちだった。

同志女性三人は、夕刻、職安を出、地下鉄でアパートへと帰った。同志女性たちは、同じ電車に乗り込み、尾行をつづけた。電車を下りた後、加藤は駅前の安居酒屋に入った。そこを出てきたのは、すでに午前三時を回っていた。

居酒屋から彼のアパートまでの途中に、線路下のと暗いトンネルがあった。同志女性の一入、二十三歳の元グラビアモデルの晴美（仮名、以下同）がトンネルの出口で待機した。トンネルをくぐった加藤は、街灯に照らされた晴美の見事な肉体に幻惑された。たちまち欲情を催し、隠していた下劣な本性を露にした。

加藤は、晴美に近寄り、卑猥な言葉をかけた。晴美は無視した。加藤はさっと怒りの表情を浮かべ、晴美の腕をつかんだ。これが合図だった。

晴美は、加藤の股間を蹴りあげた。足の甲を三度たてつづげに睾丸に叩きつけられ、加藤はうめき声をあげて地面にしゃがみこんだ。

物陰にひそんでいた二十四歳のOLの響子が、加藤をうつ伏せに倒し、両足首をつかんで広げ、踵で傷めつけられた加藤の睾丸を圧迫した。加藤はその凄まじい痛み泣き叫び、慈

悲を乞うた。だが、三人の同志女性は容赦はしなかった。情けをかける価値などない虫けらなのだから。

晴美と響子は加藤を立たせ、動かないように抑えつけた。ここで真打ち登場。二十八歳の空手インストラクター真由美は、抵抗どころか声を出す力をも失った加藤の股間を五度にわたって蹴りあげた。鍛えあげられた彼女のキックは、たちまち加藤の睾丸を二つ、打ち砕いた。

翌朝、加藤は出勤中のサラリーマンに発見された。病院に運びこまれ、命はとりとめたが、性的能力は永久に失われた。同志三人は、見事にわれわれの呼びかけを実行し、遂行した。三人には、それぞれ一千万円がWARより贈与される。

残る二人を処刑した女性にも、同額の賞金が贈与されることになる。われわれの趣旨に賛同する女性たちよ。われらの敵である横山博之、および水沼修一をすみやかに処刑せよ。彼らに想像を絶する苦痛を与え、男性としての性的能力を永久に行使できぬようにするのだ。

そして、僕と、少女売春の元締めという水沼修一の写真と名前、勤務先が小さな囲みで印刷されていた。

僕は『にっぽん・たいむず』のコピーを取り落とした。体が一人でにがたがたと震え出した。両手で体を抱きしめたが、震えは止まらなかった。嘔吐がこみあげてきた。